

## I 理念・目的・教育目標

本センターは、慶應義塾創立125年を記念して1983年に開設された研究所であり、大きく分けて3つのことを目的としている。第一には、福澤諭吉および慶應義塾の歴史に関する資料の収集・整理・保管である。第2には、福澤諭吉および慶應義塾が近代日本の歴史のなかで果たした役割について、調査研究を行うこと、そして第3には、これらの成果を、機関誌・資料集の刊行、講演会、セミナー、展覧会などを通じて、学界、学生、教職員に広く認識してもらうように活動することである。このような設立目的を考えれば、本センターが単なる自校史の資料室でないことは明らかであるが、本センターの英文名（Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies）は、その設立理念を良く表していると言える。つまり本センターは、単に福澤諭吉や慶應義塾史のための研究所ではなく、それらを視野におきつつ近代日本について研究を行うセンターとなることを目的としているのである。

## II 教育研究組織

本センターは、各学部研究科長・メディアセンター長と所長が指名した所員からなる運営委員会で、運営方針を協議決定している。また、調査研究活動は、現在数19名の所員が担い、さらに、この体制を支え、資料の収集・整理・保管の業務も遂行するため、事務長をはじめとして専任職員3名と事務嘱託3名を擁している。

この組織体制の中で、最大の問題点は、19名の所員全員が学部や一貫校を専任部署とする兼担所員であることだと言える。現在、学部や諸学校においては、業務の繁忙化が甚だしくなっており、そのような中で、兼担所員が本センターのためにさける時間は極めて限られたものとなっているのが実情である。

この状況にもかかわらず、現在は少数の所員の犠牲的奉仕によりセンターの活動は支えられているため、本センターの活動の今後の継続性を考えれば、状況は誠に憂慮すべきであり、場合によっては福澤諭吉の自筆を読める者が塾内に居なくなることさえ可能性が大きいと言える。現在、本センターは創立150年を記念して、20年計画で『慶應義塾史資料集』全20巻を刊行することを計画しているが、この体制でこのような大事業を遂行することは多大の危険性をはらんでいる。このような状況を打開し、本センターの活動を安定的に維持するためには、専任研究員を置くことが焦眉の急であり、この点が組織上の最大の問題点である。

## III 教育研究の内容・方法と条件整備

### III-1 教育・研究指導の内容等

## (1) 教育課程

建学の精神を学生諸君に広く認識してもらうため、現在、本センターでは「福澤研究センター講座」を開設するべく準備をすすめている。また、2004年度に経済学部により日吉の総合教育科目として開設され全学部学生が履修可能な「近代日本と福澤諭吉」には、本センターをあげて全面的に協力を致しており、7名の出講者はすべて本センターの所員である。

## (8) 外国人留学生の受け入れ・国際プログラムの実施の状況と課題

大学院レベルの外国人留学生あるいは訪問研究員の中には、福澤諭吉について研究をするものが恒常的におり、本センターはそれらの者たちに、さまざまな形で便宜をはかりアドバイスを行っている。

## (9) 社会人の再教育・生涯教育の実施状況、また社会人学生に対するカリキュラム・研究指導上の配慮

卒業後に、福澤諭吉や慶應義塾の歴史について興味を深める社会人は非常の多く、常にそれらの人々の対応し、また、公開講演会や展覧会の場を通じて、彼らへ新たな研究や情報を提供している。

## Ⅲ－3 国内外における教育研究交流

### (1) 国際交流推進に関する基本方針および国際交流の現状と課題

福澤諭吉に対する海外からの関心は依然として高く、本センターへの問い合わせもしばしばあり、また福澤諭吉や慶應義塾に関する研究も、国際的な視野ですすめなければならず、また進めうる状況となってきている。そのような状況に応えるべく、本センターでは、国際的視点から研究をすすめることを一つの方針としており、今年度は福澤諭吉や慶應義塾卒業生の思想と行動が、どのような形で東アジアの近代化と関係していたかを海外研究者も含む連続セミナーで考察しようとしている。

### (2) 外国人教員の受け入れ体制の整備状況

外国人研究者はもちろんのこと、国内研究者が本センター所蔵の史料を閲覧するためのスペースも確保できていない。また、外国人研究者を訪問研究員として受け入れた時、学部と同等の権利便益（たとえば研究室の提供など）を提供することも許されていない。

## Ⅳ 研究活動と研究体制の整備

### Ⅳ－1 研究活動

#### (1) 論文等研究成果の発表状況

年刊の機関誌『近代日本研究』を発行している。本誌は本年度の21巻より投稿規定を定め、

レフリー制により論文掲載を行うことを決定しており、従来にもまして、この学界におけるアカデミック・ペーパーとしての評価を高めてゆくことが期待されている。なお、本誌には、これまで多くの所員・客員所員の論文が掲載されている。また、不定期ではあるが『福澤研究センター史料』（既刊9冊）『近代日本研究資料』（既刊20冊）という2種類のシリーズ資料集や『慶應義塾入社帳』（全5巻）などの単行資料集を刊行、また、単行研究書の叢書として「福澤研究センター叢書」を既に2冊刊行している。さらに、『福澤論吉書簡集』（全9巻）や『福澤論吉の手紙』（岩波文庫）は本センター所員の全面的な協力により慶應義塾が刊行した成果でもある。

そのほか、セミナーを開催し、所員や塾外研究者の研究成果を発表することを行っている。これらの成果については、目録を毎年『近代日本研究』巻末に整理して掲載しており、また、本年4月に開かれるホームページ上でも公開する。

## (2) 特筆すべき研究分野での研究活動状況

何といても、福澤論吉および慶應義塾に関する研究や資料情報の整理に関しては世界第1の研究機関であることは間違いない。また、予算の許す範囲内で国内外の一線の研究者を招き講演会やセミナーを開催しており、その意味では本センター自体が斯学の国際的な中心であり、客員所員にも現時点で4名の外国人研究者が加わっている。国際的な共同研究への取り組みという点では、現在、東アジア近代史の中に福澤論吉や慶應義塾を位置づける試みに着手しており、本年度は海外研究者も含む講演会・セミナーを企画している。

なお、将来展望としては、海外の福澤研究者による福澤著作の自国語への翻訳を促進し、国際的に福澤研究を活性化させることが考えられており、そのプロジェクトの中心としての機能を果たすべきであるとの意見が所員の間から出てきている。

## (3) 附属研究所との関係・将来展望

本センターの運営委員は、全学部研究科の学部長・委員長がメンバーとなっており、あらゆる学部・研究科と意思疎通をはかり協力をできる体制ができている。

## Ⅳ－2 研究体制の整備（経常的な研究条件の整備）

### (1) （個人・共同）研究費・研究旅費の充実度・問題点

毎年、所長が研究代表者となり福澤基金より共同研究費の支給を受けており、現段階では、大きな支障があるわけではない。しかし、今後、『慶應義塾資料集』などの記念事業のために調査研究活動を行うとすれば、不足が生じることが予想される。

### (2) 教員研究個室等の整備状況と将来計画

現在は、専任研究員がいないため、そのスペースの必要はないが、短時間の来訪研究者が資料を閲覧する場所がないことは大きな問題である。

### (3) 教員の研究時間を確保させるための方途

所員が全員兼担であるため、各自が本センターのために割ける時間は極めて限られている。そ

の問題を解決するためには、専任研究員を置く以外にない。

#### (4) 特筆すべき競争的な研究環境の創出

本センターが担う研究の性格からして、これまでは塾内の研究費に頼るべきであると考え、科学研究費等塾外の助成には応募してこなかった。しかし、塾当局がそのことに問題がないと考えるならば、テーマによっては外部資金の助成を仰ぐことも可能であろう。

#### (5) 研究論文・研究成果の公表を支援するための措置や大学・研究機関間の研究成果を発信・受診するシステムの整備

IV-1- (1) に書いたように、研究成果発表のために各種のシステムを備え、適切な措置を行っている。また、今月からはホームページでも情報を発信することになる。また、本センターは斯学における世界第一の機関であるため、日常的に他大学諸機関や研究者、またマスコミなどからの問い合わせがあり、緊密な交流・発信をおこなっている。

#### (6) 研究等における倫理性の確保

本センターは、明治以来の卒業生個人情報に類する資料も所蔵している。そのため不必要な個人情報の公開を行わないよう注意している。

## VI 教育研究のための人的体制

### (1) 教員組織

本センターは研究所であり、教育のためのスタッフは現在いないが、研究担当として22名の所員がいる。しかし、所員は全て兼担であり専任はいない。

### (2) 研究支援職員・組織の充実度

事務・図書担当の専任者が3名、外に嘱託も在籍しており、業務の範囲が現状にとどまる限り不足はない。

### (7) 任期制、有期契約教員等、教員の流動性を促進する制度および任用の状況

所員は全て、2年の任期制である。

### (8) 学内外の教育研究組織・機関との人的交流の状況

客員所員制度があり、日本内外、塾外の研究者と密接な交流を保っている。また、塾外関連機関との間で、刊行物の交換・寄贈を維持している。さらに、講演会やセミナーでは塾内外のスピーカーを招き、研究交流を深める努力を続けている。

## **Ⅶ 施設・設備等**

### **Ⅶ－１ 施設・設備等の整備**

#### **(1) 教室等の量的・質的充実度、稼動状況および将来計画**

資料の増大とともに常に、収蔵スペースの不足に悩まされている。

#### **(2) 学生・教員に対する情報機器の利用環境・機器配備状況**

所員のための情報機器は基本的に無い。

#### **(3) 施設・設備の社会への開放に対する配慮**

現状では、所内スタッフの作業スペースしかなく、開放の希望はあるが予約制で限られて人数に開放できるのみである。

#### **(4) 記念施設・保存建物の保存・活用の状況**

本センターは重要文化財である旧図書館内にあり、常に、この建築物の雰囲気を損なわないように注意している。また、旧図書館は、福澤諭吉と慶應義塾に関する研究所である本センターは旧図書館にとって、最もふさわしい立地である。

### **Ⅶ－３ 利用上の配慮、責任体制**

#### **(1) 障害をもつ学生・教職員への施設・設備面での配慮の状況**

一般公開設備が無いため、必然的にこの種の施設・設備もない。

#### **(2) 各施設等の利用時間帯の配慮**

原則として、事務時間に予約制で公開をしている。

#### **(3) 大規模地震等の災害への危機管理対策**

特に対策を立てていない。

#### **(4) 実験等における危険防止のための安全管理・衛生管理・環境被害防止の徹底を図るための制度の確立状況**

資料の防虫処理について、環境被害がない方法を考慮採用している。

## **Ⅶ 図書館および図書等の資料、学術情報**

### **(1) 図書館資料等の質および量（コレクションマネジメント）**

福澤諭吉および慶應義塾、塾員、日本近代史に関する一次史料及び刊行物を収集し、その質ならびに量は誇るべきものがある。

### **(2) 図書館施設の規模、機器・備品の整備状況（ハードウェア）**

収蔵庫、書庫を付置しているが、施設の水準、面積とも不足がちである。

### **(3) 図書館サービスの状況（ソフトウェア）**

原則として所員のほか、塾内構成員をサービスの対象として閲覧、貸出し、参考調査などのサービスを提供している。

### **(4) 学外との相互協力、社会貢献（アウトリーチ）**

関係機関として、大学史資料協議会会員、ならびに同東日本部会副会長校を勤め、相互に協力、情報交換に努めている。

## **Ⅷ 社会貢献**

### **(1) 社会人向け教育プログラム・公開講座の開設状況**

本センターの講演会、セミナーは一般に公開している。

### **(4) 研究成果の社会への還元**

諸大学の大学史研究機関とは、研究情報・成果の交換など密接な協力をしている。

## **Ⅸ 学生生活への配慮**

### **(1) 学生生活支援の基本的な考え方**

諸学部・一貫校の学生・生徒が本センターに関係のある研究や課外活動を行う際には、できる限りの支援とアドバイスを行っている。

## **XI 管理運営**

### **(2) 教授会・研究科委員会等**

運営方針については運営委員会が、適切に協議・管理している。

### **(5) 学部・研究科等の意思決定プロセスの透明度**

運営委員会の報告・協議事項については、議事録を残し、各運営委員へ配布している。

### **(8) 管理運営に関する学外有識者の関与の状況**

適宜、顧問や客員所員の意見を聞き、運営に生かしている。

## **XII 事務組織**

### **XII-1 事務組織と教学組織との関係**

機能している。

### **XII-2 事務組織の役割**

#### **(2) 予算編成過程における事務組織の役割**

研究スタッフと協議し、予算編成について補助的な役割を果たしている。

### **XII-3 事務組織の機能強化のための取組み**

史料を扱う訓練を受けた職員の配置が望まれる。

## **XIV 自己点検・評価**

### **(2) 自己点検・評価の結果を将来の改善・改革につなげるための仕組み**

運営委員会には各学部長・研究科委員長が入っており、またセンター会議を構成する所員は各学部や一貫教育校等の教員であり、常に外部からのチェックが機能する組織であり、現状で十分であると考えている。

## XV 卒業生との関わり

### (1) 卒業生の状況把握（就職先企業、現住所、同窓会活動など）

本センターの研究業務として、安政5(1858)年開塾以来の卒業生の把握・整理に努めている。また、義塾史に役立つ資料や福澤関係の資料を保存している塾員の把握に努めてもいる。

### (3) 義塾から卒業生に対するサービス（社会人教育、招待など）

塾員・非塾員を問わず、自分の祖先の義塾へ在籍状況についての問い合わせに、常に応えている。

### (4) その他（学会等）

ア 設立の経緯：1983年4月1日、前身は塾史資料室  
石坂巖先生のお手紙

イ 目的：a 福澤諭吉・慶應義塾に関する資料の収集・整理・保管  
b 福澤門下生、慶應義塾関係者の活動・業績の調査  
c 福澤諭吉・慶應義塾が日本の近代化に果たした役割についての研究  
d 紀要（『近代日本研究』）、資料（『慶應義塾福澤研究センター資料』  
『近代日本研究資料』）、叢書（『福澤研究センター叢書』）の刊行  
e 記念講座、公開講演、セミナー等の開催  
f 展覧会などによる保管資料の公開  
g その他センターの目的達成に必要な一切の事業

\* 日常業務：問合せ、資料の貸出、情報提供

英文組織名：Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

ウ 組織（運営委員 [14+9]、所員 [19]、教員系嘱託 [1]、事務局 [3]、事務局嘱託 [2+2]）

以 上